

『イエス様がなされた宣言・2』

'20/07/19

聖書箇所:マルコの福音書 1章 14-20節(新約 p.64-)

今、巷では、「新型コロナ」のことで、様々な意見が錯綜しています。つい先日も、「Go To キャンペーン」のことで、いろいろと混乱があったようですが、私たちの周りに、あまりにも、いろいろな考えや人それぞれの都合などがあって…、いえ、「有り過ぎて」、一体、何が正しいのか？何をどうするべきなのか、誰も判断がつかないという感じではないでしょうか？

実は、近年、キリスト教界においても、様々な考えや意見が有り過ぎて、様々な“混乱”を来しています。正直、それが、あまり重要で無いような教理なら目を瞑っていても良いのですが、それが、救いに関する教理だと、そうもいきません。

命題: イエス様がなされた宣言とは、どういったものだったでしょう？

実は、今日、私たちが学んでいこうとしている聖書のみことばは、そういった教えとも関連があります。先週、私たちは、イエス様がなされた有名な宣言について学ぶ時を持ちました。イエス様がなされた宣言や、また、イエス様が発せられたお言葉を学ぶことは、かなり重要です。…と言いますのも、私たち人間の言葉とは違って、イエス様の発せられるお言葉や宣言には、何一つ、間違いが無いからです。

今日、私たちは、先週に続いて、イエス様の発せられた宣言について学ぶ時を持ちます。願わくは、それによって、私たちが、このイエス・キリストというお方がどういうお方であるのか？という理解を深めることができ…、また、私たちが今、何を考え、何をすべきなのか？そういったことのヒントが、皆さんに与えられることを願うものであります。どうぞ、今回のみことばである、マルコ 1:14 以降をお開きください。まずは、私の方で読ませていただきます。そこには、このように記されています。

- 14 ヨハネが捕らえられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べて言われた。
- 15 「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」
- 16 ガリラヤ湖のほとりを通られると、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。
- 17 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」
- 18 すると、すぐに、彼らは網を捨てて従った。
- 19 また少し行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネをご覧になった。彼らも舟の中で網を繕っていた。
- 20 すぐに、イエスがお呼びになった。すると彼らは父ゼベダイを雇い人たちといっしょに舟に残して、イエスについて行った。
- 21 それから、一行はカペナウムに入った。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂に入って教えられた。
- 22 人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられたからである。
- 23 すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。
- 24 「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」
- 25 イエスは彼をしかって、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。
- 26 すると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。
- 27 人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。」

28 こうして、イエスの評判は、すぐに、ガリラヤ全地の至る所に広まった。

I・悔い改めて、福音を信じなさい！(14-15節)

今、読んだ聖書のみことばには、大きく分けて、3つのイエス様の宣言と言うか、発言がありました。その中で、先週、私たちが学んだものは、「悔い改めて」、福音を信じなさい！×2というものでした。実は、このことは時々言われるのですが、「イエス様の宣教…、特に、その初期(初め頃)のものは、バプテスマのヨハネのものとそっくりであった…」ということに関して、私たちが理解していることは、「いや、バプテスマのヨハネとか、イエス様の初期の頃のメッセージが、どうかではなくて…、聖書のみことばが一貫して、私たちに、悔い改めて信仰とを要求しているのだ！」ということでありました。

そうだったでしょう？だから、先週、私たちは、何か所か聖書のみことばを確認して…、この聖書“全体”が、私たちに悔い改めて信仰とを要求していることを確認したのです。私たちが理解していることは、本物の信仰には、必ず、悔い改めてが伴うし、また、本物の悔い改めてには、信仰無しに行き着くことは無い…、言わば、本物の信仰と悔い改めてとは、コインの裏表であって、その一方だけが欠けてしまうことなんて有り得ないのです。

でも実は、先週、時間の関係もあって、1つ説明できなかったことがあります。…と言いますのは、ここ15節では、『信じなさい！』という命令を説明するに当たって、『福音を(信じなさい！)』という目的語があります。一体、どうして、ここ15節で、イエス様は、「わたしを信じなさい！」ではなくて、『福音を信じなさい！』という風に言われたのでしょうか？⇒そのことについては、私たちが、このマルコ伝を学び始めた時、1番最初に学びました。どうぞ、マルコ1:1をご覧ください。そこで、マルコは、この福音書を書き始めるに当たって、『神の子イエス・キリストの福音のはじめ。』と断ってから、イエス様の生涯について記してくれています。

実は、このことは、以前にも言いましたけれども、このみことばを原語のギリシヤ語で観察をすると、1番最初に、『はじめ』という言葉(ἀρχή)が書かれてあって…、「ここから、神の子イエス・キリストの福音が始まります…」という、マルコによる宣言(=説明?)が記されています。つまり、マルコに言わせると、福音とは、イエス様のことであり…、このイエス様こそが、私たちにとっての“良い知らせ”なのです！だから、イエス様のことを伝えない福音のメッセージなんて有り得ないし…、このイエス様のことを伝える時、私たちは、どうしたって、私たちの罪や裁き、また、救いについて語らないわけにはいかないのです。

II・すべてを捨てて、わたしに従いなさい！(16-20節)

さて、今度、私たちは、イエス様が、この文脈でなされた2つ目の宣言・発言に注目していきましょう。どうぞ、今度は、今回のみことばの内、16-20節の部分をご覧ください。ここでイエス様が発せられたメッセージは、「すべてを捨てて、わたしに従いなさい！」ということであり、そのことを、今から皆さんと一緒に確認していきましょう。聖書のみことばは、ついさっき読ませていただきましたので、今から読むことはいたしません。

●シモン・ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネの 召命 !

しかし、簡単に読んでくださっても分かる通り、ここ 16-20 節には、イエス様が選ばれた12弟子たちの内、シモン・ペテロとアンデレ、また、ヤコブとヨハネという4人の“召命”に関する記事が記されています。どうぞ、今日の週報のメッセージノートの空欄には、「召命」=神様が、特別な恵みに召し出してくださったという意味の「召命」という言葉で、空欄を埋めておいてください。

さて、まずは、弟子のシモン・ペテロとアンデレの“召命”に関する部分から先に見ていきましょう。実は、ペテロとアンデレの召命に関する記事は、共観福音書…、つまり、マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝という3つの福音書に記されています。どうぞ、ルカ 5:1-11 をお開きください。そこには、こう、記されています。『1 群衆がイエスに押し迫るようにして神のこぼを聞いたとき、イエスはゲネサレ湖の岸べに立っておられたが、2 岸べに小舟が二そうあるのをご覧になった。漁師たちは、その舟から降りて網を洗っていた。3 イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた。4 話が終わると、シモンに、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」と言われた。5 するとシモンが答えて言った。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばとおり、網をおろしてみましよう。」6 そして、そのとおりにすると、たくさん魚が入り、網は破れそうになった。7 そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっしょに上げたとこ、二そうとも沈みそうになった。8 これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」と言った。9 それは、大漁のため、彼もいっしょにいたみなもの者も、ひどく驚いたからである。10 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンにこう言われた。「こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。」11 彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。』

⇒実は、ここルカ 5 章の記事は、3つの福音書に記されている、ペテロたちの召命に関する記事の内、1番詳しいと思われる。今日のみことばと、ここルカ 5 章で、『シモン』という名前で紹介されている人物は、シモン・ペテロのことです。彼の元々の名前はシモンでありましたが、ある時に、イエス様から、ペテロ（「岩」の意）という名前を与えられて、聖書中では、多くの場合、ペテロという呼び名で記されています。もうかなり前になりますが…、このみことばからもメッセージをさせていただきましたが、今日は、時間の関係もあって、このみことばを詳しく見ていくことはしません。しかし、ペテロたちの召命に関する記事から、皆さんに是非分かっていたいただきたいことは、彼らが払った犠牲と言うか、その“決心の大きさ”であります。今は違っていて、失業保険もハローワークも無い、この時代…、彼らは、どのような思いで、漁師を辞め、イエス様の招きに従っていったのでしょうか？

皆さんもご存じの通り、この当時、多くの者たちは皆、“世襲制”でした。つまり、ほとんどの者たちは、その親の職業を受け継いでいったのです。だから、イエス様も、公の生涯に入られる前、おおよそ 30 歳になられる頃までは、大工をしていたと考えられています。…と言うのも、マリヤの夫ヨセフが大工をしていたからです（マルコ 6:3）。

それと同じように、この時まで、シモン・ペテロとアンデレとは漁師をしておりました。恐らくは、彼らの親も漁師をしていたのでしょう。…それが、イエス様の言われた、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。』という招きを受けて、イエス様に従っていったのです。正直、イエス様が、彼らに、「すべてを捨てて、わたしに従いなさい！」ということをおっしゃられたのではありません。しかし、イエス様が言わんとしていたことは、そうだったのです。だから、彼らは、それを実行したのです！しかも、今日のみことばの 18 節を見ると、『すぐに…』ということと、『網を捨て置いて従った…』とあるように、彼らは、イエス様に招かれてすぐに、それを実行したのです…。

皆さん、漁師が（ですよ…）、その網を捨てて、しかも、慣れ親しんだ職場？であったガリラヤ湖からも離れて、しかも、親からも離れて、イエス様に従っていくということが、どれほど、大きな選択 & 決断であるか分かっていただけます？…でも、彼らは、それをした！と言うのです。しかも、イエス様から召された…、そのすぐ後に…。

どうぞ、今度は、ヤコブとヨハネの“召命”について見ていきましょう。どうぞ、もう1度、今日のみことばに戻ってくださいます。その 19-20 節の部分に注目してみてください。ここも、その前に記されている、シモンとアンデレが召された時の記事と、基本的には同じような内容について記されています。

でも、敢えて、その違いを説明するなら、先程のシモンとアンデレの召命の場合、彼らは、自分たちの職業や環境を捨てて、イエス様に従っていったことが分かりますが、その後の、ヤコブとヨハネの場合は、『父ゼベダイを…』とか、『雇い人たちといっしょに…』という説明があります。…と言うことは、イエス様が彼らのことを召された時、そこには、父ゼベダイと雇い人たちが居たのです。それと、今日は、時間の関係もあって、聖書の箇所は開けません。このヨハネは、当時の大祭司と知り合っていた（ヨハネ 18:16）とか、エルサレムに彼らの家があった（ヨハネ 19:27）ということから、彼らは結構裕福であったことが分かります。…にも関わらず、ヤコブとヨハネは、そういった財産や家族など、すべてを捨てて、イエス様に従っていったのです。

●イエス様からの 招し(招き) とは？

さあ、それでは今から、皆さんと一緒に考えていきたいことがあります。…確かに、イエス様は、彼ら4人たちのことを、イエス様の“特別な弟子として”…、「人間を取る漁師となるべく、召してくださいました。」しかし、それ“だけ”でしょうか？…恐らく、この時まで、彼ら4人は、イエス様のことを、あまり詳しくは知らなかったようです（ヨハネ 1 章に、シモンとアンデレの記事があるが…）。

果たして、イエス様は、彼ら4人たちのことを、人間を取る漁師とするために“だけ”召されたのでしょうか？それとも、イエス様は、彼ら4人たちのことを、救いへと招いてくださったのでしょうか？⇒実は、多くの教会では、クリスチャンが神様によって召される時に、2種類の招し…、あるいは、2段階の招しがあるという風に考えます。…まず、1つ目の招しは、信仰を持つか否か、つまり、イエス・キリストを信じるか否か、という選択であります。そして、もう1つは、フルタイムの献身…、つまり、牧師や宣教師になるか否か、という招しであります。

実は、今、多くのキリスト教会では、神様からの招しというものを、今さっき言ったような…、2種類の招しというものを、あまりにも、明確に…、きっちりと使い分ける傾向にあります。そのため、彼らは、聖書の中にある、数多くの「イエス様による招し」というものも、「これは、信仰を持つか否かの招しである…」。今度これは、信仰を持った者に対する、フルタイムの献身者になるかどうかの招しである…」と言って、聖書に書かれてあるイエス様からの招しというものを、ある意味、都合良く、使い分ける傾向にあります¹。

しかし、果たして、どうでしょう？…イエス様は、イエス様を信じようとする者たちに対して、常に、「あなたは、すべてを捨てても…、このわたしについてきますか？」ということ問われたのではないのでしょうか？例えば、この時だって、そうです。彼らは、恐らく、4人とも、あまりイエス様のことは知りませんでした。そうですよね？しかし、この時、イエス様は、彼ら4人の漁師たちに対して、「あなた方は、すべてを捨てて…、このわたしについてきますか？それができますか？」ということ問われたのではないのでしょうか？

先週、私たちは、信仰と共に起こる「悔い改め」ということについて考える機会を持ちました。そこで私たちが確認したように、聖書は、「私たちが救われるためには、信仰と共に、悔い改めも必要だ！」ということを教えてください。じゃあ、皆さん、聖書が教える「正しい悔い改め」って何でしょう？

⇒実は、長年の間、多くの福音派の教会で支持されている、高木慶太先生の記された「信じるだけで救われるか」という信仰書があります。その本の中で、高木先生のおっしゃるのは、①悔い改めとは、

¹ 「信じるだけで救われるか」高木慶太著（いのちのことば社）「「救われること」と「弟子になること」」p.72-78

自分の罪やそれまでの生き方を深く反省したり、それを換えようとするのではなく、神に関する考え（多神教から唯一神？）を換えることである²…。多くの人が、救いの条件は「悔い改め」と「信仰」の2つであると教えるが、もしそれらが救いのための2つの条件なら、なぜ聖書は、はっきりそう言わず、「信仰」だけを救いのための唯一の条件として教えているのだろうか？³いま仮に、神が聖書の中で示された救いの門の幅が100mあったとする。それを、だれかが人間的配慮によって幅75mに狭めたでしょう。その結果、何人かの人が「救いに入ることは結局、自分などには無理なのだ」と考え、失意のうちに立ち去ったなら、その人の魂の責任はだれがとるのだろうか？⁴というような、(問題)発言があります。

しかし、果たして、神様が御決めになった救いの門の幅を、私たち人間が狭めることができるものでしょうか？果たして、私たちは、神の主権を超えて…、本来、救われるはずだった人を救われないうちにしたり、その逆に、救われなはずの人を、私たち人間の力で救ったりできるものなのでしょうか？

それと、実は、私の持っているギリシヤ語の辞書で、「悔い改める(μετανοῶ)」という言葉を引き見ますと、こんな説明がされてありました。「①心を変える、考えを変える、人生における考え方の根本をすっかり変える…、②考え方を根本から変えた結果として、罪と古い生き方から絶縁する…」って…。

また、新聖書辞典という書物には、悔い改めについて、こう説明がなされてありました。ちょっと難しいのですが、どうか、ガマンして聞いてください…。「(抜粋)①旧約聖書において…。悔改めの要素を含むものとしては、「立ち返る」という語が多く用いられており、罪や神への不服従の状態から神に立ち返ることを表している…。②新約聖書において、悔改めは、(1)個人個人の具体的経験として明示されている。それは単なる後悔や打算的なものであってはならず、深い罪の認識、生活の改変を伴う根本的、徹底的な転換であった…。(2)悔改めをするのはその人自身であるが、そのために神御自身が恵み深く働いておられる。悔改めは神からの賜物であり、聖霊が罪を認めさせるといふ悔改めに至る働きをされる。③悔改めとは、(1)単なる思念の領域の問題ではなく、全人格にかかわる根本的な転換である…」と説明されてありました。分かってくださいますか？…要は、聖書的な悔い改めというのは、神様からの賜物であるがゆえに、それは全人格的な変化であって、必ず、行ないと言いか、神様に喜ばれるような変化を伴う！ということです。

皆さん、分かってくださいますか？実は、これらは、先程紹介した高木先生の発言とは、全く正反対のことを主張しているのではないのでしょうか？どうか、皆さん、先週も引用しましたが、イエス様がマタイ19章で、「金持ちの役人」に関連して教えてくださった、みことばを思い出してみてください。…あそこで、イエス様は、「人が救われるということが難しい」という趣旨のことを教えてくださった後で、こう続きます。マタイ19:25-26、『25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」26 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。』』⇒ここで、イエス様は、「本来、救いというものは、大変難しいもので、人はそれを自分自身で勝ち取ることはできない！でも、だからこそ、神様がそれをしてくださるのです！」という趣旨のことを教えてくださったのではないのでしょうか！だって、ローマ3:11のみことばは、こう教えてくれないませんか？『悟りのある人はいない。神を求める人はいない。』って…。また、エペソ1:4には、「救われる者は、神が世界の基の置かれる前からみこころの内に選び、神の主権の内に決められている！」ということが教えられてあります。

² 「信じるだけで救われるか」高木慶太著(いのちのことば社) p.88, p.100

³ 「信じるだけで救われるか」高木慶太著(いのちのことば社) p.82

⁴ 「信じるだけで救われるか」高木慶太著(いのちのことば社) p.4, p.55

もちろん、ここだけではありません！例えば、マタイ13章で、イエス様は、幾つかの例えを使って、本当に、救いの価値を知った者は、「例え、何を失おうとも、救いを得るためには、すべてのものを犠牲にすることができる…」ということを見せてくれているのではないのでしょうか？…この聖書のみことばが書き記されていた時代に、イエス様のことを真の神、私の救い主と信じることは、いのちの危険が伴うことさえ有り得ました。しかし、イエス様だけでなく、この聖書のみことばは、そういったことを、私や皆さんに要求しておられるのではないのでしょうか？「義のために迫害される者は幸いである！人々は、師であるわたしを迫害したのだから、弟子であるあなた方のこともまた、迫害するはずである！」って…。また、こんなみことばもあります、『確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。』(Ⅱテモテ3:12)…果たして、神様からの、このような警告は、一部のクリスチャンにだけに与えられた、限定的なものだったのでしょうか？

<励ましの言葉>

今日、最後に皆さんに聞きたいことは、あなたは何を犠牲にしても救われたい！ということ願っておられるかどうか？救いの価値を、本当に分かっているかどうかです。あるいは、私は、イエス様のことを一番に優先したいと思っています！という思いがあるかどうかです。イエス様は、私たちを救うため、そのいのちさえ犠牲にして、私たちのため、救いの道を備えてくださいました。果たして、私やあなたは、このイエス様に対して、どのように報いたいと考えておられるのでしょうか？どうか、せつかく、神様が用意してくださった救いの恵みを、無駄にしないようにしてください。

そうして、まだ、イエス様を信じておられない皆さん、神様は、あなたが1日も早く、真の神であり、救い主であるイエス様を信じて、受け入れてくださるよう、あなたを導いてくださっています。どうか、その救いの御手を拒まないでください。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。